

子育て支援に携わる職員ヒアリング調査結果

1 趣旨

令和6年度に実施する「富山市こども計画」の策定に向けて、現場で子育て支援に携わる職員から、子育て家庭に関する実情についての具体的情報を収集するとともに、職員間での情報共有を図るもの。

2 実施日時

令和6年1月29日（月）午前10時～

3 実施場所

婦中中央児童館

4 参加者 7名（◎は座長）

◎富山大学教育学部 西館 有沙 准教授

保育士3名（市立保育所、児童館、子育て支援センター）

保健師2名（こども家庭部）

看護師1名（市立保育所）

5 主な内容

（1）子育て家庭の状況や課題について

（2）養護・配慮が必要な家庭の状況や課題について

（3）支援者の状況や課題について

（4）本市の子育て環境の状況や課題について

※詳細は次ページ以降に記載。

6 意見の概要

(1) 子育て家庭の状況や課題について

①保護者からの相談内容

<子どもに関する事>

- ・生活習慣に関する相談が多い
- ・発育、発達に関する相談が多い（歩かない、言葉が出ない、身長・体重が伸びない・増えない、離乳食など）

※医師が診ても判断できないような早い段階から、発達の遅れ等について心配しすぎてしまう保護者がいる。

- ・保育所等での友達関係に関する相談が多い。

<子育てに関する事>

- ・子育ての不安や悩みごとの相談が多い（子どもが言うことを聞かない、食べない、夜泣きがひどい、夜に寝ない、噛みつき、癩癪など）
- ・自分の子育ての仕方が合っているか相談されることが多い。（特に1人目を子育て中の母親から）

<保護者に関する事>

- ・父親の育児休業取得が増えたことによる夫婦の衝突、父親に対するストレスに対する相談がある。これまでなかった新しい悩みだと感じた。

※出産前の育児教室等で、父親・母親それぞれの役割を考えるようなカリキュラムが必要と考えている。

- ・体調面等で保育所等への送迎が大変という相談がある（自分でファミリーサポートセンター等のサービスを利用することが難しい方への対応に悩む。）

②保護者の状況や課題

- ・ワンオペで子育てしている母親が多い。
- ・祖父母世代が仕事をしていて日中家にいないため、親族の支援が受けられない場合がある。
- ・精神疾患や精神疾患の既往歴がある方が増えている。
- ・相談件数は増えているが、自分で動けない、SOSを出せない人たちもいる。
- ・対人コミュニケーションが苦手な方が増えている。メールやSNS等ならコミュニケーションを取れるが、直接会って話すことが苦手な保護者が増えている。講座等のグループワークを嫌がる母親もいて、ママ友を作りたいと考える

方がいる一方で、他の方と喋りたくない人や1人で過ごしたい人もいるのかなと思う。

- ・今の保護者は、既存の集まりがあれば参加するが、自分たちで自主的に集まり交流を深めていくことは難しいと感じる。
- ・夫婦間のコミュニケーション、祖父母とのコミュニケーションがあると、子育てのちょっとした不安も和らぐと思う。
- ・子どもの発達等について情報量が多く、些細な事でも保護者は不安に思ってしまうので、保護者の心の持ちようや心構えといった視点も重要と思う。

③保育所から小学校へ進学する際の不安

- ・保育所から小学校にあがる際には、発達障害のある子であれば、保護者の同意を得たうえで、その子へのかかわり方などを小学校に伝えているが、小学校に伝達することを望まれない場合は学校の先生も苦勞するので、どうすればよいか悩む。
- ・顔を合わせて何気ない会話をするのが、保護者の精神的ケアになると思うが、小学校になると、先生と保護者が会う機会そのものが減ってしまう。
- ・保護者から、一緒に来ている子の兄や姉が小学校に行けていないといった相談をされることがある。
- ・不登校の子どもをもつ保護者は精神的な負担が大きい。そういったところへの支援がもっと必要と感じる。
- ・国の出産・子育て応援事業の伴奏型相談支援も3歳ぐらいまでが対象。経済的支援とともに、相談体制も小学校以降は少し薄いのかなと感じる。
- ・保健福祉センター等での相談も就学前児童の保護者対象のものが多く、保健師がかかわっている。臨床心理士の面談も就学前児童の保護者対象なので、小学校になると切れてしまうことは現状としてあると思う。

(2) 養護・配慮が必要な家庭の状況や課題等

①医療的ケア児

- ・医療的ケア児を受け入れる保育施設は増えてはきているが、まだ少ないので、多くのお子さんが産後1年ぐらいでスムーズに保育施設に入所できるのに比べて、医療的ケア児は入所のハードルが高いという相談もある。
- ・食事とか掃除等を援助してもらいたいが、医療的ケア児＝障害児ではないため、利用できる障害福祉サービスもなくて大変という相談がある。
- ・受け入れられる保育施設が少なく、場所が限られるので送迎が問題になる。
- ・医療的ケア児の受入れ先が増えればと思うが、例えば、保育所に看護師が1人だけいても、休んだ時の体制をどうするかなど人員の問題がある。

②ひとり親家庭

- ・数としては少ないと思うが、父子家庭の支援というのは、少し見落とされがちと感じる。所得が高ければ、ひとり親でも手当は支給されないし、父子家庭で、お父さんが娘を育てている場合にいろいろな場面で支援の必要が出てくると思う。

③外国籍の家庭

- ・外国籍の妊婦が増えている（特にベトナム国籍）。技能実習生どうしで結婚することが多く、その場合に言語や経済面、住まいの問題、車がなくて病院に行けないなど、夫婦が抱える課題が多い。
- ・発達が気になりな子どもがいても、日本語でコミュニケーションが取れない中、どのように相談や受診につなげていくか悩む。
- ・子どもは学校等で日本語を覚えるが、保護者は日本語がわからないので、子どもが通訳をするために学校等を休んで、市役所に一緒に来ることもある。
- ・翻訳アプリを使うが、その国の方言のようなところで、うまく使えないことがある。
- ・うまく情報が届かない。例えば、健診に来ないので訪問すると、健診の通知は届いたが何かわからなかったということがある。

④経済的に苦しい家庭

- ・生活保護を受けている方から、保育所の保護者会費や園外に出るバス代などのお金がなかなか支払われないことがある。またバス代が高いから、園行事を欠席することもあるなど、子どもの経験に影響がある。

・子どもがやりたいと言っても、経済的な理由でできないことが増えていくと思うと、子どもの自己実現が難しくなっていくので、どうにかしてあげられないかと思う。

⑤気がかりな家庭

・医師の診断がつかないような気がかりな家庭が増えてきているように思う。増えているのではなく、見えてきただけなのかもしれない。

・心配なお子さんの保護者に話を聞くと、保護者自身も小さい頃、自分の親との関係が大変だったり、メンタルを崩したりしたということがある。支援が必要な子どもの保護者こそ心配。

・保育所等への送迎が問題になる。病気の保護者なら障害福祉サービスの送迎を利用できる場合があるが、それも多動なお子さんだと事業者の対応が難しく、通わせられないといった問題がある。

・気がかりな子どもでも診断がつかないと支援制度の対象とならない。そのような制度にかからない方への支援が難しい。保護者が自ら動いて何とかしていければよいが、それもなかなかできない。

・保育所に診断はないがサポートが必要な子が多く、加配職員が、そのような子の対応に追われ、本来見るべき子どもをしっかりと見てあげられていない状況もある。

・すこやか健診という形で、気がかりな子どもの健診を行っており、小児神経科医師や公認心理士の個別相談に繋いでいるが、そのニーズが増えていると感じる。相談枠を増やしたが、4、5か月ほど待ちで、適切な時期に相談や受診に繋ぎにくい状況にある（全国的に同様な状況と感じる）。

・気がかりな子どもの情報を、保健福祉センターに伝えることに母親が同意しない場合がある。タイミングよく健診があれば、そこで把握できるが、1歳半健診から3歳児健診、また富山市では、3歳児健診の後は就学児健診と間が空いてしまうので、そのような家庭への支援に悩んでいる。

・精神的に不安定な保護者で医師の診断があれば、サービス利用につながっていくが、受診もされず、診断もつかないといった方は対応が難しい。（受診のハードルが高い方には、臨床心理士への相談を促すなど、アプローチを工夫している。）

（３）支援者の状況や課題等

- ・保育士では、育児と両立が難しく、自分の子育てを優先したいということで仕事を辞めることが多い。

- ・学校の先生も精神的な理由での休職が多いと聞くが、保育士も、日々、いろいろな保護者の方に対応しなければならないので大変だと思う。

- ・保育士の業務は多岐にわたり負担が多いが、給料がそれに見合っていない部分がある。保育士になりたいという学生が、給料面で家族を養っていけるかということに不安をもつ。処遇改善と、業務をどれくらい分担できるかが課題。富山市は、地域的に子育てをサポートしてくれるような地域の人材も比較的いると思う。

- ・子育て支援センターに来てサポートしていただいている子育てボランティアが市立保育所等に出向いていくなど、地域の人材の活用ができればよいと思う。

- ・支援に悩むような重いケースが多い。支援者どうしで愚痴を言ったり、思いを共有したりするような場も必要。自分でいっぱい抱えてしまうので、何でも言えるような場があればよいと思う。

- ・個人情報の関係があり、それ以外の職種の方に相談することが難しいが、誰かに言うことで精神的な安定が保てることもある。支援者への支援が必要になっている。

(4) 本市の子育て環境の状況や課題

①施設の整備

- ・雨が多いので、公園はたくさんあるが、室内の遊び場が少ない。
- ・富山市子育て支援センターは子ども用品を近くに売っているところがなく、おむつを忘れた時や子どもの服が汚れて緊急で洋服買いたいといった時に不便なところがある。そういった周囲の環境も含めて、子育て支援センターがもっといろいろな場所に増えればよいと思う。

②サービスの充実

- ・高齢者だと中心市街地までバスで100円、公共交通の利用を促進したり、外出を促したりといった市の施策があるが、そういうイメージで、親子利用にかかるサービスがあればよいと思う。
- ・学童保育に弁当を持っていくのが大変という声を聴く。
- ・保育中に子どもの体調が悪くなった時に、いつもと同じ環境でゆっくり休める場所があれば、保護者も安心ですし、子どもたちにとってもいいと思う。他施設に病児保育室があっても、子どもにしたら、いつもと違う場所で違う人に見てもらうことになる。お金もかかるし、場所が遠いと保護者の負担も大きい。
- ・妊娠や健診、保育施設の入所などの行政書類について、多言語化したものがあればよいと思う。

③企業の子育てへの理解・協力

- ・「風邪がひどいが、今日保育所に行ってもいいか。」と保護者によく言われる。その裏には、仕事を簡単に休めないということがある。一度登園して後から電話くださいと言われることもある。職場の人が子育てに協力的で、子どもが病気で急に休むこともしやすくなるような環境になればよいと思う。
- ・面白い子育て支援をしている企業があれば、紹介していくのもよいのではないか。